

## 親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」

## この身は本願のはたらく場所

—往くのも還るのも本願力—

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第42回（第42回のシンポジウムは、本紙12頁を参照ください）から第44回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第43回と第44回は、「莊嚴菩薩功德成就」の第一首について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第41回の問題提起（「二種回向〈往相回向と還相回向〉」）からその一部を紹介する。

（越部良一）

## ■ 往還の対面

往相の回向というのは、私どもの煩惱の生活を突破して、大涅槃の果を得しめる。還相の回向は、逆に真実証の側からはたらい、普賢の徳を修すると、こういうふうに関は顕らかにしてくる（『教行信証』『証卷』に曇鸞の『浄土論註』を引文。『真宗聖典』286頁、東本願寺出版部を参照）。大涅槃を得るといふこと自身が謎みたいなものでしょう。その上、大涅槃から還ってくる。これは謎のまた謎のようなものです。これを、死んで浄土に往って、還ってくるのだと解釈してしまうのは、一つの解釈であって、回向は如来の大悲のはたらきを語るわけだから、そうした考えを少し変えなければいけないのではないかと思うのです。

曾我量深先生は、どういうふうに関をいただかれたかという、往相還相の回向は、往還の対面だというふうに関ったのです。この考え方のヒントは、もう60年も前ですか、進駐軍が

入ってきたときに、それまで日本人は左側通行であったのですが、右側通行にしろと。それで、「人は右、車は左」というような標語を作った。人は車と対面して歩けば危なくない。その標語を曾我先生は、ああ、これが往相の回向、還相の回向の考え方だと。つまり、往かしめるはたらき、往相と、還らしめるはたらき、還相とは、われわれの上で出遇うのだと。われわれに往相の回向がはたらくと、われわれに教えてくださる還相のはたらきが来て、ぶつかる。念々に往還がぶつかる場所に、われわれは生きる。往還の対面ということをおっしゃったのです。

これは、一つの考え方です。単に往相の結果、還ってくるというように、自分が往ったり来たりするのではない。自分は往くのみである。親鸞聖人という方は、「親鸞は弟子一人ももたずそうろう」（『歎異抄』同628頁）という言葉もありますけれど、自分は師匠にはならず、凡夫として求め続ける。如来の教えに遇って行くのみである。それでは、自分だけが求め、自分だけがたすかって、他の人を見捨てていったかという、決してそうではない。向かい合って教えてくださる以上に、われわれに教えを与えてくださった。つまり、「後ろ姿が人を育てる」と、よく言いますよね。つい、われわれは、前向きになりたがる。「お前はだめだ」とやりたがる。だけど本当は、人はそれでは育たない。人をつぶしてしまう。自分は求める。求めると、人も「ああ、そうだな」と求めてくださる。その求めさせるはたらきは、本願力である。人が引っぱるのではない。人を生か

している真理が、他の人も生かしていく。

曾我先生が言われるように、自分は往相の回向をいただければ、還相の回向に値遇する。還相の回向に出遇っていくのだと。曾我先生は一貫して、真実証から教えが出てくるのだと。如来の教えは「証」から、「さとり」から出てくる言葉、大涅槃の果から出てくる言葉だから、われわれを育てることができるのだとおっしゃった。だから、本当にはたらくものは、還相の回向である。われわれは、それに出遇っていく力を与えられる。出遇っていく力が、往相の回向である。往還の回向は対面であると。これは曾我先生の代表的な考え方の一つです。

金子大榮先生の考え方は、親鸞が往ったように、みんな往くのだと。往かしめるはたらきが往相の回向である。その後ろ姿が、還相の回向だと。こういう考え方です。後から往く人間は、往相の回向の、後ろ姿の還相の回向に出遇うと。これも、わかったような、わからないような話ですけれども、わかると言えばわかる。

### ■ 本願力のサンドイッチ

人間は真理を聞いていけばいいというのが、親鸞の姿勢です。その道を徹底した点が、すごいと思うのです。自ら凡夫だと言いながら、すごい凡夫です。徹底して凡夫なわけです。われわれは、すぐに凡夫を忘れる。忘れる凡夫ほど始末に負えないものはない。凡夫であることを忘れないということは、念仏の智慧なのです。

だから、本願力が往かしめるのであって、往くのも還るのも本願力なのです。凡夫は行きもせず、還りもせず、ここに居るだけです。ここに居る人間に永劫の信心が与えられる。そこに大涅槃が来ると。つまり、はたらいている場所は、私にはたらいている。往還二回向がはたらいている。だから、私はそれを信じていくことができる。「弥陀の回向成就して 往相還相ふたつなり これらの回向によりてこそ 心行ともにえしむなれ」（「高僧和讃」同492頁）と。信心も念仏もともに、如来の往相還相の回向によって与えられるのだと。与えられる場所は、

この凡夫である。だから、自分でする必要はなくて、本願力がはたらいている。こういう信心が、他力の信心だろうと思うのです。

サンドイッチというものが有りますけれど、あるいは、どら焼きね。中のあんこの美味しいどら焼き、上下で挟むでしょう。どら焼きのあんこを美味しく感じさせるのは、上下の皮である。皮のまずいどら焼きなど食べられたものではない。上下の皮があって、見たところもどら焼き、食べてみてもそう。まあ、比喻ですよ。上の皮と下の皮とに分かれて、中を挟んでいるように、本当は一つのはたらきが二つに分かれている。本願力のサンドイッチが二種の回向となっている。そういうイメージで考えると、少しは考えやすいかなと思うのです。

われわれは自分で生きていますと思っておりますけれど、実は大地に支えられ、空気があって生きています。下に大地があり、上に空気がある。だからサンドイッチでしょう。われわれは、俺が自分で生きてるのだ、俺が教えてやっているといたいから、とにかく愚かな上に愚かなのですね。われわれは、そんなふうに我執で考えているけれども、本当は、大きなはたらきに包まれて生きています。私は、そのはたらく場所になる。誰でもみんな、その場所になる。それは誰のものにもならない、誰の持ち物にもならない。そういうものを開いて教えてくださったことが、親鸞という人の大きなお仕事ではなかったのかと思うのです。（文責：親鸞仏教センター）

### 「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2006年3月27日(月)午後6時30分～9時  
4月は休講となります。

5月23日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック  
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分